

一人一人に寄り添い、安心して話せる関係づくりについて

不登校児童の状況

対象児童は、入学当初から欠席が多かった。保護者は、登校を望んでいるが、当該児童は、学習や友達関係の困難さから学校生活への拒否感が強く、登校しても教室に入ることができなかった。

具体的な取組

○学校でできることを増やす

担任が用意した個別学習の内容（折り紙等の作業を含む）を校内別室指導支援員と一緒に別室で取り組む。



○学校生活でのSOSの発信を学ぶ

学校生活で困ったときや学習で分からない時の意思表示の仕方を、教員の指示の下、校内別室指導支援員が当該児童に繰り返し伝えた。

校内別室指導支援員は、2人配置されていて、1人が中心となって当該児童と良好な関係を築いた。

○取組場所を選択する

「皆と同じように取り組みたい」という気持ちが高まり、教室に行くが、教室に入れなかったり短時間で出てしまうことがあった。教室前の廊下で過ごす選択肢を取り入れたことで教室や廊下で過ごせることが増えた。



○教室復帰後も支援を受ける

教室で過ごせることが増加した。気持ちをコントロールすることができないときは、校内別室指導支援員と対話することで落ち着くことが多くなった。

週明けの登校は渋りがちだったが、校内別室指導支援員との対話により気持ちの切り替えが早くなっている。

成果

落ち着いた居場所と校内別室指導支援員という頼れる存在により、当該児童は、安心できる居場所であることを理解することができた。欠席は昨年同時期の10分の1になった。担任も、校内別室指導支援員の支援により、負担が軽減した。

課題

- ・校内別室指導支援員と不登校児童との相性等により信頼関係が違ふこと
- ・学校に登校することが困難な不登校児童への登校支援